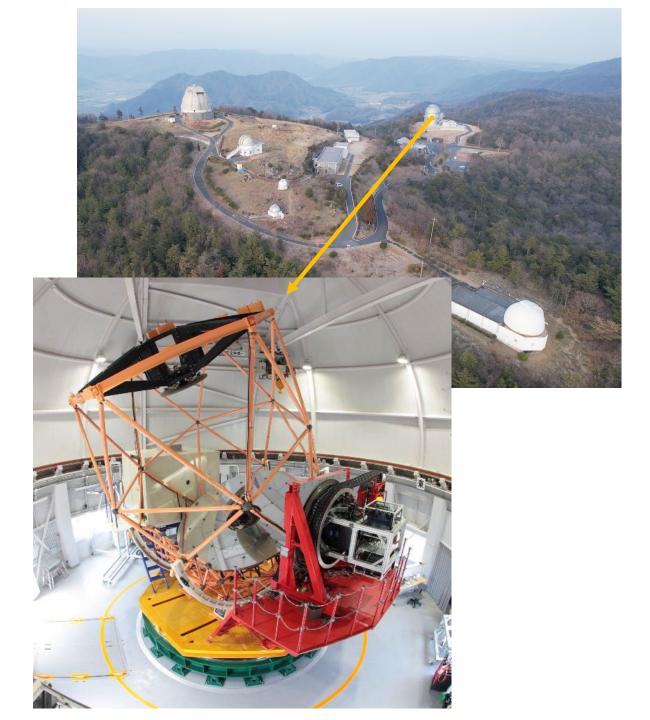
# ToO自動観測に向けたせいめい望遠鏡のキュー観測システム開発状況

前原裕之(国立天文台)

#### 3.8mせいめい望遠鏡

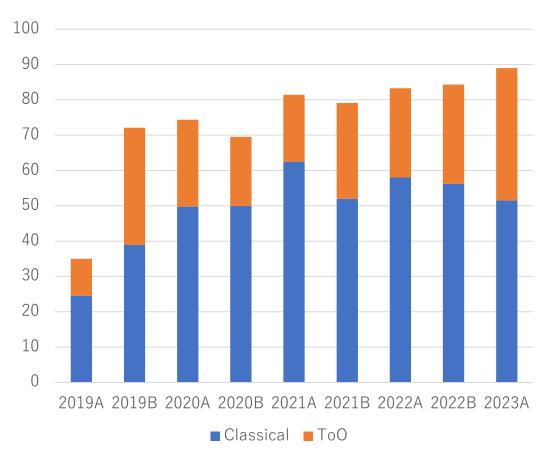
- 京都大学が2018年に岡山に設置
- ・2019年から科学観測開始
  - ・観測時間の50%が全国大学共同利用に供されている
- 観測装置
  - KOOLS-IFU(可視光面分光装置)
  - TriCCS (3色同時高速撮像・分光)
  - GAOES-RV (視線速度精密測定用 高分散分光器)
  - 近赤外偏光撮像装置(2024年中?)



# せいめい望遠鏡: 共同利用の状況

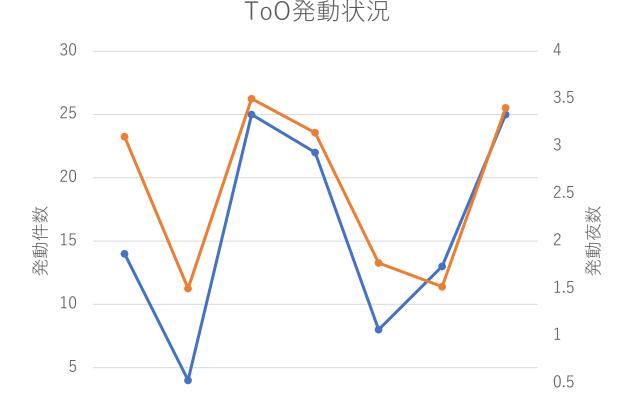
- 各セメスターの夜数
  - 共同利用: 60-70夜
  - 京大時間: 60-70夜
    - 大学間連携は京大時間内で実施(上限10%)
- 50-60夜程度をクラシカル課題(予め日程の決まっている観測課題)に割り当て
- 残り10-20夜程度はDDT
  - ToOの補填、クラシカル観測課題への追加割り当て、現地職員の科学観測・エンジニアリング時間として利用
- ToO課題は30夜前後を採択
  - DDTの夜数 (=補填可能な夜数) よりも多め に割り当てている
  - 晴天率が1/3→実際に発動して観測が行われるのは要求夜数の1/3程度と想定される。





## ToO観測の状況

- 発動方法
  - ・共同利用: Slackで連絡
  - 京大時間: Webフォームから連絡
- 発動状況(共同利用)
  - 2023Aは39夜採択に対し発動は25件で合計3.4夜
  - 多くてもToO採択夜数の10-15%
    - 半分は京大時間で発動できないこと、 晴天率が1/3であることを考慮すると、 最大でも1/6程度しか発動されないことを考慮すると妥当か?



→ 発動件数 → 発動夜数

2023A

2020A

## 将来的な自動ToO観測

・他の望遠鏡での発見情報をもとに 観測天体をデータベースに登録



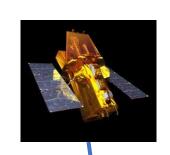
データベースから天体の情報を取り出して観測の可否を決定



• コマンドをキューに登録



・観測を実行



天体情報登録



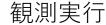
観測天体DB

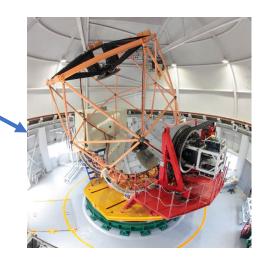
観測評価プログラム (コマンドの自動生成)

天体情報取り出し・ 観測可否評価

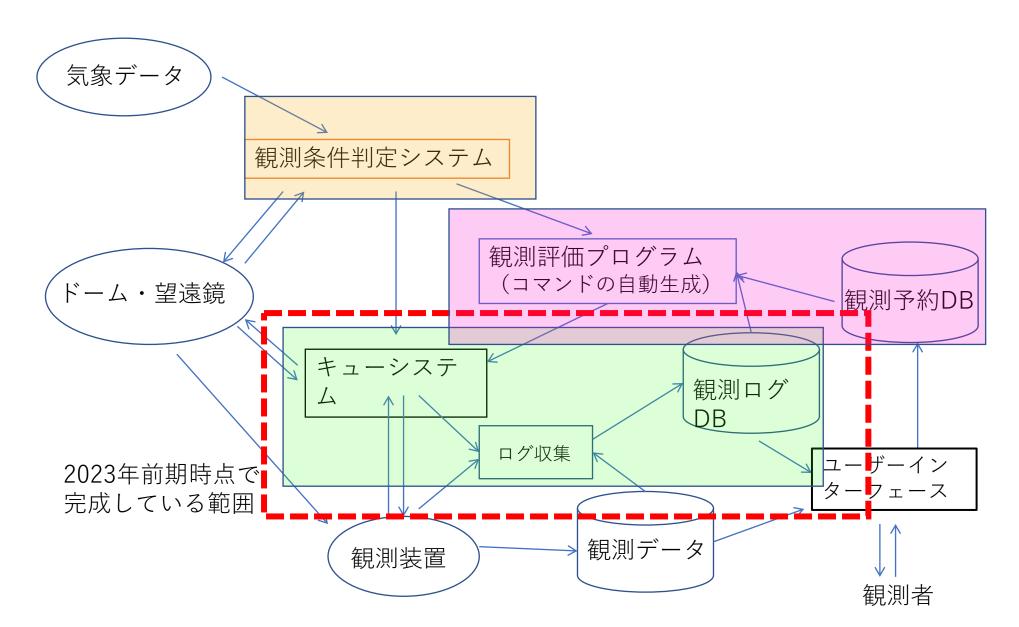
コマンド登録

キューシステム

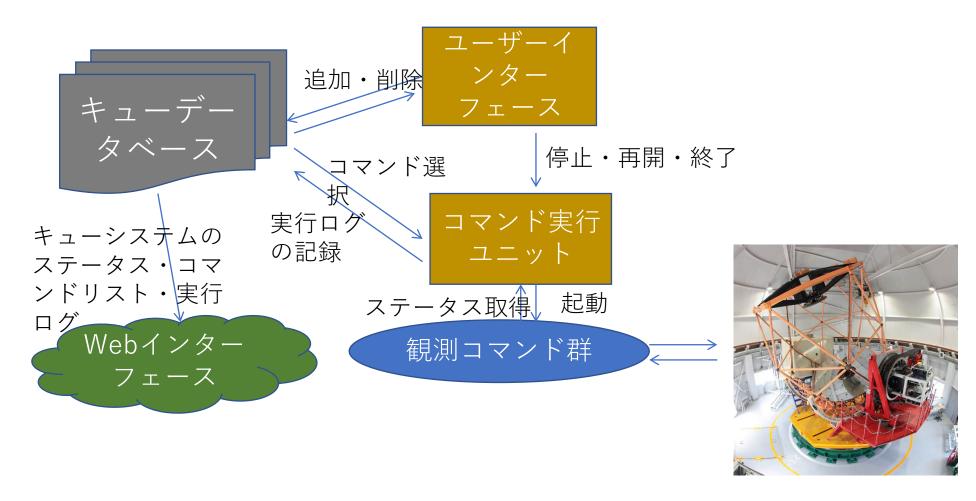




# 最終的に作りたい自動観測システムの全体像



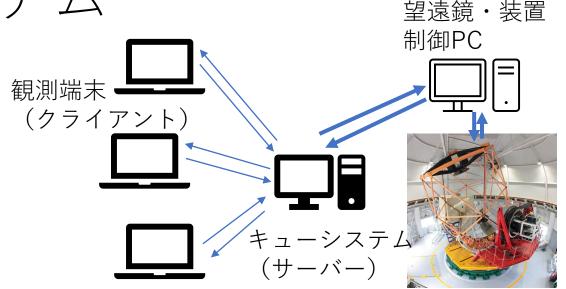
# キュー観測システムの概要

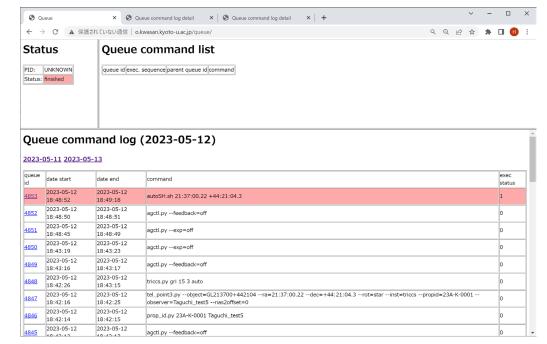


望遠鏡・ドーム・観測装置

# 現状のキュー観測システム

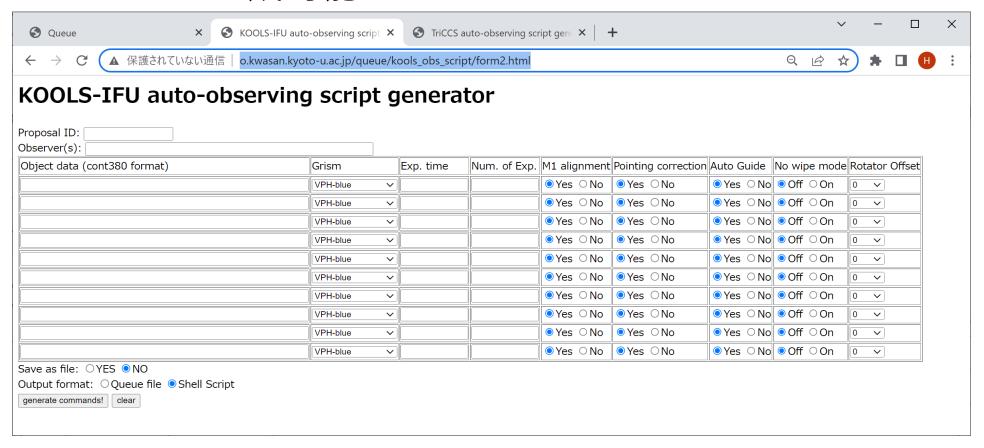
- ユーザーが作成した観測コマンドファイルを キューに投入して観測を実行
  - 以下の動作が可能
    - SHカメラを用いた主鏡セグメントの調整
    - 観測装置視野への天体導入 ※KOOLS-IFUの視野 (8"×8") の任意の位置へ天体を導入可能
    - オフセットガイダー用のガイド星の選択、ガイ ダーの自動設定
    - BIAS/DARK、ドームフラット、較正光源の取得
- コマンドラインのUIとWebベースのステータ ス確認用ページを用意
- 天体が見つからない場合などエラー時には キューシステムが一時停止状態に移行
  - Slackへエラーを通知
  - 失敗したコマンドを再実行して観測を続ける or エラーが起きたコマンドに依存している部分を キャンセルして次の天体観測を行うことが可能





#### キューファイルの生成

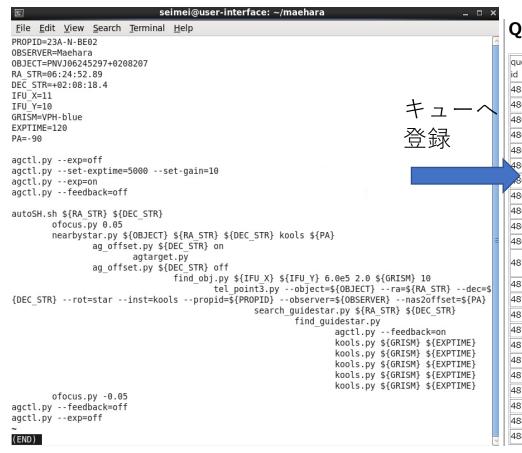
天体の情報や装置の設定から観測コマンドを記述したキューファイルを生成可能



# 生成されるキューファイルの例

```
seimei@user-interface: ~/maehara
File Edit View Search Terminal Help
PROPID=23A-N-BE02
OBSERVER=Maehara
OBJECT=PNVJ06245297+0208207
RA STR=06:24:52.89
DEC STR=+02:08:18.4
IFU X=11
IFU Y=10
GRISM=VPH-blue
EXPTIME=120
PA=-90
agctl.pv --exp=off
agctl.py --set-exptime=5000 --set-gain=10
agctl.py --exp=on
agctl.py --feedback=off
autoSH.sh ${RA STR} ${DEC STR}
       ofocus.py 0.05
       nearbystar.py ${OBJECT} ${RA STR} ${DEC STR} kools ${PA}
                ag offset.py ${DEC STR} on
                        agtarget.py
               ag offset.py ${DEC STR} off
                                find obj.py ${IFU X} ${IFU Y} 6.0e5 2.0 ${GRISM} 10
                                        tel point3.py --object=${OBJECT} --ra=${RA STR} --dec=$
{DEC STR} --rot=star --inst=kools --propid=${PROPID} --observer=${OBSERVER} --nas2offset=${PA}
                                                search guidestar.py ${RA STR} ${DEC STR}
                                                        find quidestar.py
                                                                agctl.py --feedback=on
                                                                kools.py ${GRISM} ${EXPTIME}
                                                                kools.py ${GRISM} ${EXPTIME}
                                                                kools.py ${GRISM} ${EXPTIME}
                                                                kools.pv ${GRISM} ${EXPTIME}
                                                                kools.py ${GRISM} ${EXPTIME}
        ofocus.py -0.05
agctl.pv --feedback=off
agctl.py --exp=off
```

- ・行頭にtabを挿入することで依存 関係の設定が可能
  - 複数入れることもできる
  - 例: SHカメラによる主鏡調整が成功 したら以後のコマンドを実行する、 というような動作が可能
- shell script風の変数が使用可能
  - ユーザーによる編集やキューファイルを再利用する際の利便性を考慮
    - キューへ登録するときに値が入る

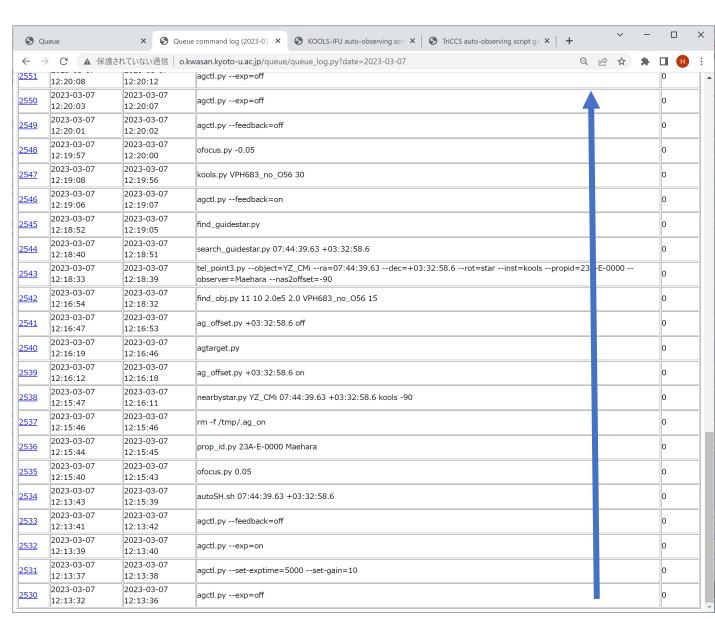


#### **Queue command list**

,				
	queue id	exec. sequence	parent queue id	command
	4859	1		agctl.pyexp=off
	4860	2		agctl.pyset-exptime=5000set-gain=10
	4861	3		agctl.pyexp=on
	4862	4		agctl.pyfeedback=off
	4863	5		autoSH.sh 06:24:52.89 +02:08:18.4
•	4864	6	4863	ofocus.py 0.05
	865	7	4863	nearbystar.py PNVJ06245297+0208207 06:24:52.89 +02:08:18.4 kools -90
=	4866	8	4865	ag_offset.py +02:08:18.4 on
	4867	9	4866	agtarget.py
	4868	10	4865	ag_offset.py +02:08:18.4 off
	4869	11	4867	find_obj.py 11 10 6.0e5 2.0 VPH-blue 10
	4870	12	4869	tel_point3.pyobject=PNVJ06245297+0208207ra=06:24:52.89dec=+02:08:18.4rot=starinst=koolspropid=23A-N-BE02 observer=Maeharanas2offset=-90
	4871	13	4870	search_guidestar.py 06:24:52.89 +02:08:18.4
	4872	14	4871	find_guidestar.py
	4873	15	4872	agctl.pyfeedback=on
	4874	16	4872	kools.py VPH-blue 120
	4875	17	4872	kools.py VPH-blue 120
	4876	18	4872	kools.py VPH-blue 120
	4877	19	4872	kools.py VPH-blue 120
	4878	20	4872	kools.py VPH-blue 120
	4879	21	4863	ofocus.py -0.05
	4880	22		agctl.pyfeedback=off
~	4881	23		agctl.pyexp=off

# 天体光積分開始までにかかる時間

- KOOLS-IFUの場合:現状では おおむね5-5.5分
  - M1調整: 1.5-2分
  - 近くの星での指向誤差補正 (pointing込み): 2-3分 ※KOOLS-IFUの場合のみ
  - ガイド星選択: ~0.5分
- TriCCS(撮像モード)の場合:2-3分程度
  - 視野が広いので精密な指向誤差補正が不要
  - 分光モードではKOOLS-IFUと 同等の時間になる見込み



#### 観測の流れ

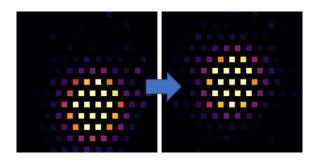
- 位置補正用天体導入
  - 観測天体の位置から20'以内にある11等より明るい天体をGaia DR3カタログから検索して望遠鏡をその天体に指向する

KOOLS-IFU視野 8"×8" オフセットガイダー

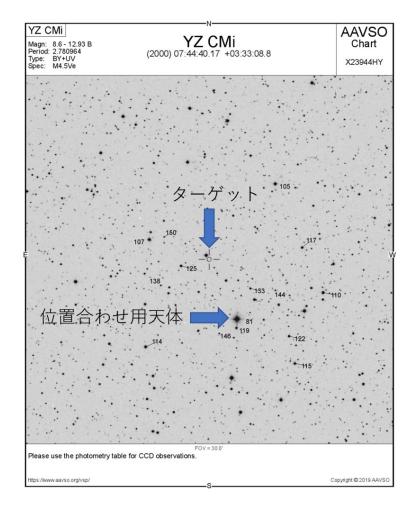
視野(~90"φ)

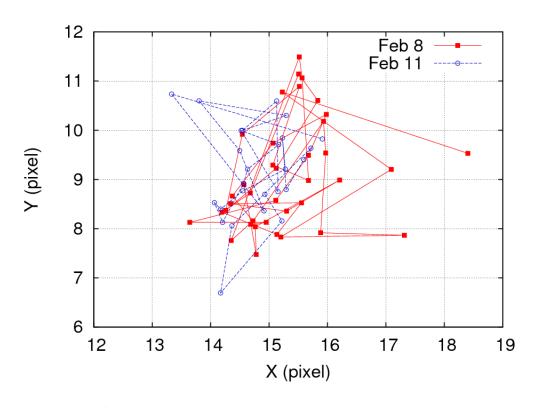
• 指向誤差補正

- オフセットガイダーを用いて位置補正用天体を検出→補正
- 視野~3分角、ポインティング誤差(RMS~7-8")の補正には十分
- その後、KOOLS-IFU自体を使ってIFU上の指定した位置に天体を導入
- 観測天体導入
- ガイド星自動選択
  - 天体位置からをオフセットガイダーの可動範囲にある14等より明るいガイド星をカタロ グから探し、適切なステージ位置へ移動
  - →オフセットガイダーの積分開始&ガイド星検出
  - →ガイド星の目標位置を設定し、追尾補正を開始
- 積分開始・オフセットガイドON/OFF
  - それぞれの制御プログラムへコマンドを送る

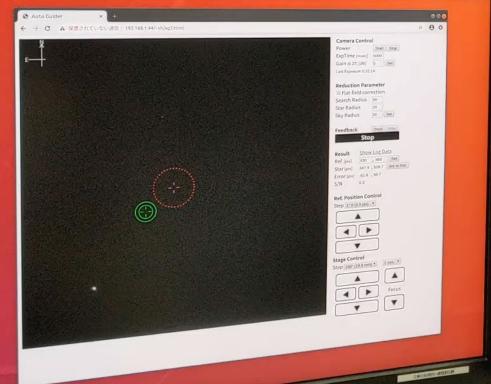


## KOOLS-IFU視野への導入精度





- 目標位置:X=15, Y=9
  - 2/8 : X\_RMS=0.92, Y\_RMS=1.10
  - 2/11: X\_RMS=0.62, Y\_RMS=0.95
    - ~0.6"/pix. (15"/25 pix.)



rpoint

Support

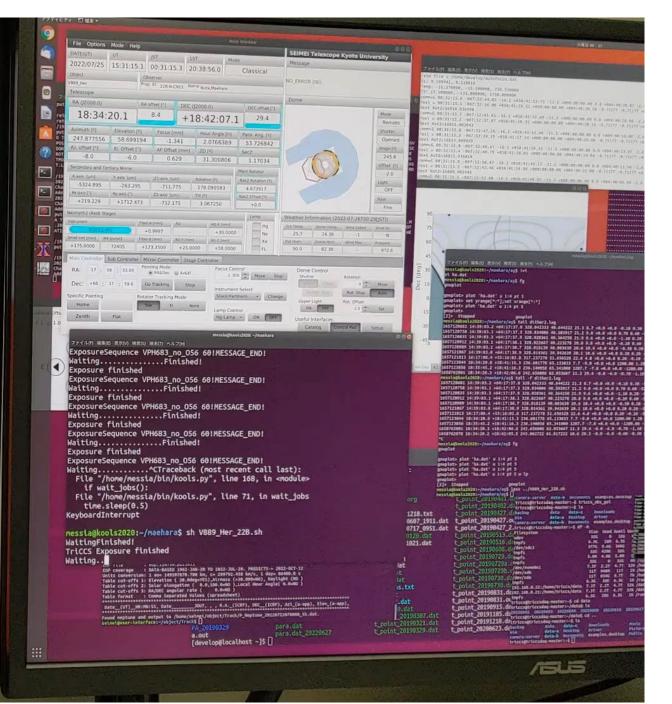
ring-Front

ss-Middle-

ss-Lower-

#Segment

iss-Lower-



#### 今後のキュー観測・自動観測システムの開発

<u>● 第 0 フェーズ (−2023)</u>

実施済

- ▲ 観測スクリプトの整備
  - <u>■ ユーザーがWebフォームで作成した観測スクリプトを実行して観測する(リスクシェアで公開中)</u>
- <u>■ 23Aから観測スクリプトを使った観測を共同利用に供する予定</u>
- 第1フェーズ (2023-2024)
  - ・ 手動キュー観測の共同利用での供用開始
    - ユーザーが天体リスト、観測モード、積分時間を指定を指定して観測スクリプトを生成
    - ユーザーが手動でキューシステムを制御、観測スクリプトをキューに投入して観測実行
- **→**リスクシェ アで公開中
- ToO用に自動的にキューに観測スクリプトを投入する機能の実装・テスト → 開発中
- 第2フェーズ(2024? )
  - 天候など観測可能な条件の判断を自動化
    - 観測者の判断を介さない全自動観測、自動ToOの開発
    - 複数装置への対応も含めて自動化するには環境モニターの増設・追加が必要(外部資金申請予定)
    - 最低でも3-5年くらいはかかる?